
キミと繋がる変人の因子

右腕左

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミと繋がる変人の因子

【Nコード】

N5805Z

【作者名】

右腕左

【あらすじ】

蹴られた瞬間にひらりとパンツが見えたのが救いだった。

(はい注目) pixiv重複投稿。

蹴られた瞬間にひらりとパンツが見えたのが救いだっただ。

もう一度言う。蹴られた瞬間にひらりとパンツが見えたのが救いだっただ。

でなければ、学校の廊下を高校生ではおよそ考えられないような慎ましきで歩いていた僕が、突然何の因果も無く知らない女の子に左頬を蹴られたという事実を、不快感なしに受け入れる事は出来なかっただろう。

一度きりの人生。どうせ生きるなら早く生きたい。

たえ僕という人間の中でも比較的優先順位の高い顔面を蹴られたからと言って、パンツを見れたのだから僕はもう満足である。

「大丈夫？ いや、先輩すみません！ あの、捕まってください」

男としては少し情けない体制で尻もちを付いていた僕に手を伸ばしながら、知らない女の子、つまり破格の対価でパンツを見せてくれた女の子が心配そうに言った。

「ああ、すまない」

僕への呼称や彼女のリボンの色から下級生だと判断して、先輩らしい落ち着いた声色を心がけて僕は呟いた。

差し出された手はしっかりと握る。彼女の手は絹のような手触りで、かつマシユマロのような感触に骨抜きにされそうになったけれど、僕は何とか立ち上がる事が出来た。

「僕は白が一番好きだ。だから、素直にありがとうと言わせてもらう。ちなみにベタだが縞模様も好きだ」

名残を惜しみながら彼女の手を離し、僕はまず礼を言った。そして彼女の姿を改めて見る。

この、彼女に対する僕の視線が図らずも舐め回す風になってしまったのは、彼女の魅力ゆえなのだろう。舐め回すように人を見る習慣の無い僕が舐め回すように彼女を見ているのだから、その原因は

彼女の魅力だ。という演繹的推論に則っているのだけれど、そんな確認は必要がない程に彼女は魅力的だった。

漆黒の黒髪に大きくて生き生きとした瞳。全てを絶妙に調和する鼻に、薄くそれでもふんわりとした唇。僕は彼女に自然界の美しさに近いものを見た。

「白？ えっと……すみません、何の話ですか？」

「いや、気にしなくて良い。それにむしろその無関心さが良い」

彼女のスカートが長い丈で膝下まであるのを見て、先のパンツの価値がぐんと上がるのを感じながら、僕は振り返りその場を離れようと歩を進めた。

「それでは」

そう言いながら背後に示すため挙げる右手。僕史上一二を争う紳士さで幕を閉じれると思った時、その挙げた右手を、何かが掴んだ。いや、何かと言うか、彼女が掴んだ。

「待つてください！ どんな神経してるんですか！ 再度言います。どんな神経してるんですか！」

「こんな神経だと剥き出せる程に簡単な造りはしてないんだよ。だから、すまない」

そう言いながらも僕の心境はかなり緊迫していた。何しろ異性に手を握られているのだ。僕の右手を彼女が両手で、それも包み込むように。

右手が彼女に溶けていくような感覚が訪れ、普段サボり気味な僕の心臓も、この時ばかりはバクバクと力強く脈打った。

「そういう意味じゃありません！ 私は先輩の顔を蹴っちゃったんですよ？ それについて一言も言及しないのは恐怖さえも感じます！」

彼女が声を上げる度に僕の右手がニギニギふわふわと握られ、そしてニギニギふわふわと握られる度に僕の足腰は容赦なく震える。

とても冷静に話せるような状況では無かった。

「え、えっと。とりあえず……手を放してくれ。今僕は右手を負傷

しているんだ。そうやって執拗に握られると少し痛む」

「あ！ すみません！」

彼女がはじけるように手を離れた。良かったと思う反面、少し残念な気持ちになる自分は、当然ながら堂々という。

「それで……なんだったかな」

「私がなぜ先輩を蹴ったのか、気にはならないのですか？」

「僕はもう満足だ。ゆえに気にはならない。それでは」

またも振り返りその場を離れようと歩を進める。今は明確に、逃亡を図っているのだ。

蹴られた理由なんて気になるに決まっている。しかし、それを聞いて何になるのだろうか。もし僕に幸せ線グラフなるものがあつたとすれば、蹴られた時こそ情けなく下がったものの、その後のあれこれで目下急上昇中なのだ。出来れば高い位置をキープしたまま平和に家に帰りたい。

それなのに蹴られた理由を聞かされてどうなる。そんなもの目を見張るほどの急降下を見せ、挙句の果てにビヨヨンと地面に突き刺さるのは目に見えていた。

と、そんな事を考えながら設定を遵守して左手を挙げる。「それでは」と言おうとしたのだけど何だかついさつき言ったような気がする。さすがに二連続は駄目だろう。引き出しの少ないつまらん男と思われるの良い気はしない。

けれどそうなると話す言葉が全く出て来ないのだから、要するに僕は引き出しの少ない男なのかもしれない。しかしその事実を知られるのはどこことなく嫌なので絞り出した結果。

「ばいばい」

旧知かよ。

思わず胸中で突っ込む僕。さすがに「ばいばい」は無いだろと顔が熱くなるのを感じながら速足にシフトして歩いていると、その挙げた左手を、完全に無視して、僕の背中に何かがしがみついた。

いや、何かと言うか、彼女がしがみついた。

「待ってください！ もつと蹴られた事とか私の事とかに関心を持つてください。でない又何も始まらないじゃないですか」

耳元から聞こえる彼女の声は、少し震えていた。

「始まるって……何が」

とにかくやわらかかった。

とにかく熱かった。

季節は秋に入ったばかりで、気温は低いけれど双方が薄着。なにかもつ色々な快感が、彼女から背中を通してダイレクトに伝わってくる。

「甘くて酸っぱい何かです！」

至上のふにふにに支配されている背中から、僕のありったけの理性がどくどくと漏れ出しているのを感じた。

脳が熱くなり盛大に空回りして、彼女が言う言葉は聞き取れても、それらが意味のある何かとしての体を成さない。

「ご、ごめん。ちょっと意味が分からない……」

放心状態になりながらも精一杯言った。しかし、彼女は僕の精一杯を見事に無視し、続けて言う。

「私、こういうの初めてで、どうやったら仲良くなれるのか全く分からなくて、とにかく印象付けるのが大事って言うのを思い出した時には先輩を蹴っちゃってたんです」

「史上稀にみる馬鹿！？」

あ、繋がった。

突っ込んだ事で理性やら思考力やらの知を司る諸々がガツチリと定まり、今の状況や彼女の言いたい事が、鮮明に理解出来た。

僕のふところにまで回されていた彼女の腕をゆっくりと剥がす。ある程度の距離を置いて振り返り、彼女の目を真っ直ぐに見た。

「僕はやめた方がいい」

落ち着いた声で、丁寧と言う。

「なんでですか？」

「僕の性格は他人と戯れるのに適してない」

僕は友達も、当然恋人も、今まで一度も出来た事がない。近づいて来てくれる人は何人かいた。しかし、二言三言言葉を交わすだけで漏れなく誰もが僕の周りを去っていく。

僕の性格が致命的だなんてことは分かっていた。それも今になっては治すつもりも無いし、女子に興味はあるけれど、恋人を作るつもりも無い。僕は独りで生きて行くのだ。その覚悟は出来ている。

「確かにさっきから凄く変な人ですけど、でも、私は大丈夫です」「大丈夫な訳がない。いつもの僕を知らないから言えるんだ。そんなこと」

「いつもの先輩なんて知りません。けど、それでも、私は大丈夫です」

僕が真っ直ぐ見ていたはずなのに、今は僕が真っ直ぐに見られている。彼女の目を見ていると仕舞いににゅるりと吸い込まれるような気がして、僕は思わず目を逸らした。

「なんでそこまで……。僕も君も初対面だ。それなのになぜそこまでの事が言える」

彼女は少しの間も入れる事無く、然も当然の事を言っているかのように答えた。

「先輩の事が好きだからです」

ドクンと、心臓が大きく脈打つ。

彼女の言葉に僕の意志がひん曲がりそうになった。しかしすぐさま盤石に固め直し、必死に堪える。

僕と関わった事で彼女が後悔するのは目に見えているのだ。お互いにマイナスイメージになる為に行動を起こすなんて、どうしようもなく馬鹿げてる。

「変な人の事を好きになるのは、個性的な自分でいたいという欲求から来るただの錯覚だ。周りとは違う自分に優越感を覚えたいだけのただの自己満足だ。きちんと自分を見る。それはキミの本当の気持ちじゃない」

彼女は少し俯き、違います、と、僕にささやいた。

「先輩。蹴ったのは最初ですよ、時系列を考えてください。私が好きなのは――ひとえに顔です」

「ひとえに!？」

「もっぱら顔だけです」

「もっぱら!？」

彼女は顔を赤くして腰をクネクネしながら甘い声で言う。

「はい。先輩の顔は丸くてちっちゃくて目もくりくりで、それに加えて背もちっちゃいんですから、初め見た時は小学生でも迷い込んだのかと思いました。それがよく見てみるとうちの制服を着てるしネクタイの色は上級生ですし、そんな容姿で年上だなんてもう完全にタイプです、最高です。という訳で付き合ってください」

「ただのシヨタコン!？」

こんなに大きい声を出したのは久しぶりだった。

そう、僕は彼女の言う通り、小学生に見間違えられるような、女子でも絶賛蹴り易い位置に顔面があるような、引き止めるため踏ん張りながら発した言葉が耳元で聞こえてしまうような、そんなミニマムな容姿をしている。ちなみにこれに関して気に病んではない。決してコンプレックスではない。

その事に悩んだ時期は確かにあった。筍のようにニヨキニヨキ伸びる周りとの差異に、劣等感を覚えた時期は確かにあった。

けれど今の僕は、どうにもならない事に対して悩む事が、いかに無意味かを知っている。

この小学生のような容姿も、致命的な性格も、これが僕のアイデンティティなんだと受け入れているのだ。世界中に数多はびこる、いつまでもウジウジと悩むことしか脳の無い奴らとは訳が違う。

「少年愛者のキミが僕の容姿にゾッコンだって事はわかった。けれど僕は、キミが好む少年のような性格ではない。無垢なんて言葉とは何光年離れてるか分からないし、自分で言うのもなんだが、醜い性格をしてる」

「ああもう!」

彼女は突然嵐のようにキレた。

「先輩はあれですか、お馬鹿さんですか。おじいちゃん辺りはまだアウストラロピテクスですか。お母さんはファミコンかなにかですか」

「そこまで言う！？」

「私の言った事を聞いてなかったのですか。私が好きなのは先輩のフォルムです」

「フォルムって……」

「ですので先輩の性格がいかに醜かろうが、先輩の心がいかにウジ虫然としていようが、私には関係ありません」

「いや、ウジ虫とまでは言っていないけどな、よく考えてみる。現に今キミはキレてる。僕に対してあっさりと嫌悪してる。それも流れからしてキミはなかなかの短気みたいだし、僕と付き合えばこんな事が数時間おきに起こるぞ」

彼女は自分の感情に気付いたようで、苦そうに顔をゆがめた。

しかし直ぐに顔を整え、再度真っ直ぐに僕を見つめる。

「それでは逆に聞きます。先輩は私の事をどう思いますか」

「どうって……」

「好きですか。可愛いですか」

彼女の事を改めて見る。目、鼻、口、輪郭、髪、身体と順に見まわして確信した。

これ以上無いほど好みである。

「……まあ、好き」

蚊が鳴くような声で呟いた。

「なら付き合ってください」

「それは……駄目だ」

「なぜですか」

「だから僕の性格が——」

彼女は僕の言葉を堂々遮って、凜とした声で言った。

「利害関係は一致しています。ひとえに先輩のフォルムが欲しい私

と、自分の性格が気になって大好きな異性と付き合う自信がない、この上なく男らしくない先輩。どうですか、私は先輩の性格なんて気にしません」

「そうは言うが、事実キレてただろ。あんな事があればお互いに嫌な気持ちになる。利害が一致しているとは決して言えない」

「何を言ってるんですか。私は先輩にキレた事などありません」

「いや、ビックリするくらいキレてたから、『ああもう！』とか叫んでたから」

「勘違いしないでください。本人が言うんですから絶対にキレてません」

「嘘付け、確実にキレてたから」

「キレてません」

「だからキレてたって」

「ああもう！ 何度言ったらわかるんですか！」

清々しいほどにあっさりキレた。

気が付けば身体中が火照り、燃えるように熱い。あれ、何だろうこの気持ちは。なんというかもう、すごいイラつく。

彼女に対しての被虐的な気持ちがはつきりと生まれた。

そこまで強情なら後悔させてやる。こんな人間もいるという事を、僕が直々に教えてやる。スパルタで人生経験を積ませてやる。

「……わかった。なら付き合おう」

「やったー。ついに折れたー！」

彼女は両手を上げて喜んだ。

腹が立つ。彼女の言動の全てに腹が立つ。折れたって何だよ。

「後悔しても知らないからな」

僕は少し眉根を寄せて、重々しく呟いた。

「大丈夫です」

かなりの自信が宿った眼差しで、彼女は言った。

僕の視点からでは、その自信に一切の根拠も見い出せない。

彼女は続けて言う。

「それでは早速ですが、今から一緒に河川敷に行きましょう」

「脈絡が無さ過ぎる。今日はお互いに疲れただろ。だからもう帰ろう」

恐らく今年に入ってから一番疲れたし、久々にこんなに話したからか、喉も痛い。

世界で唯一安心できる、自分の部屋へと一直線で帰りたいかった。

「行きましょう。拒否は許しません」

「いや駄目だ。今日は帰る」

「泣きますよ」

「こっちこそ泣くぞ。僕の容姿じゃ鬼に金棒だぞ」
睨み合う。

火花を通り越して爆発でもしそうだった。

「わかりました。明日にします」

彼女は渋々言った。

「やったー。ついに折れたー！」

彼女の声色をかつこ悪く真似して、両手を上げて喜ぶ。ムスツとする彼女の顔を横眼で見ながら、僕は続けて言う。

「それで、なんで河川敷なんだ？ 何をしに行く」

彼女はムスツとした顔を少しも隠すことなく、不機嫌そうに呟いた。

「キスをしに行きます。私のファーストキスは『夕暮れの河川敷、対岸に沈む夕日をバックに』と決めているのです」

聞き捨てならなかった。

「いや待て、僕もファーストキスは『冬の星座が燦然と輝く夜、雪降り積もる木の下ベンチで』と決めている。墓場まで持って行くつもりだったがこうなった以上、こればかりは譲れない」

そう僕が言い終った時には、彼女は蹲り、両手で顔を覆っていた。両手の隙間から途切れ途切れ、震えた声が聞こえてくる

「私……子供の時から……ずっとずっと夢で……毎日夢見て……だから……」

彼女は泣いていた。言葉を飲み込むような嗚咽が聞こえる。

彼女は色々な事を隠さずにズバズバ言う。それはつまり正直という事ではないだろうか。真っ直ぐという事ではないのだろうか。本当に河川敷でのそれが夢なんだとしたら、僕が壊していいのだろうか。

初めては人生で一度きりだ。

取り返しは付かない。

それを僕が奪って本当にいいのか。

「……わかった。明日河川敷に行こう」

断腸の思いで、僕は言った。

「やったー！ ついに落ちたー！」

彼女は両手を上げて飛び上がりながら、笑いの混じった勝ち誇った顔で、僕を見下ろす。

ああ、あれだ。

こいつ、最低だ。

「あの、キミさ」

「キミじゃないです。優衣と呼んでください」

「優衣君さ」

「君付けもやめてください。呼び捨てでお願いします」

「……ゆ、優衣さ」

「はい」

「友達いる？」

「いません」

彼女、優衣からは、僕と同じ匂いがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5805z/>

キミと繋がる変人の因子

2011年12月19日13時57分発行